

知覚内容のパースペクティブ性と現実性

高村夏輝 (Natsuki Takamura)

松蔭大学

鈴木貴之氏（以下、敬称略）の著書『ぼくらが原子のあつまりなら、なぜ痛みや悲しみを感じるのだろうか』は、物理主義の立場から意識の表象理論によって意識を自然化し、いわゆる「ハードプロブレム」の解決を目指した著作である。同様の試みは数多くなされているが、鈴木氏の著作には、類書に見られない大きな特徴がある。それは、「意識経験の実在性」（114～7頁）を解決するべく議論を展開している（179～182頁）ことである。

机の上のコインを見るとき、意識にはコインそのものが立ち現われているとしか思われない。またそのコインが持つ色や形といった性質は、単なる普遍としてではなく、現にその机の上において現実化されているように経験される。一方、机の上のコインが円いと意識的に考えているとき、私はコインや円さを意識しているのだとは言えるだろうが、意識にはコインそのものが立ち現われているようには思えず、また円さも現実化されたものとして意識されてはいない。このように、知覚と意識的思考とでは、その内容の経験のされ方に大きな違いがあるのだが、意識の表象理論はこれを説明できないのではないか。また、錯覚や幻覚の経験内容にも、知覚の内容と同じ現実性が認められることから、これらの経験内容にはクオリアという心的存在者が含まれていると結論しなければならないのではないか。

このように、「意識経験の実在性」の問題は意識の自然化にとって極めて重大な問題であるにもかかわらず、物理主義者が「この問題にたいして明示的に態度を表明することは、きわめてまれ」（116頁）である。この困難な課題に挑戦するべく、鈴木氏が用意した道具立てが、「本来的表象」と「派生的表象」の区別（130頁）、そして「自然主義的観念論」というアイデア（171～182頁）である。

どちらも志向的内容であるにも関わらず、知覚と意識的思考の内容には違いがある点に関しては、前者の経験は本来的表象によって表象されている内容であるのに対し、後者では、内語のようにイメージされた文・発話などの派生的表象によって表象された内容だからだと説明することが可能である（75頁）。一方、正誤の違いがあるにもかかわらず、知覚も錯覚・幻覚の内容も現実的なものとして経験されるという点に関しては、どちらの経験

においても「世界のなかにそれ自体として存在するものを経験していない」（178 頁）のだと答えられる。

もし意識経験の実在性を示す論点が、知覚と思考の内容の違いと知覚と錯覚や幻覚の同等性に尽きているのならば、以上の議論を通じて鈴木はこの問題に十分応えていると言えるだろう。しかし意識的な知覚経験が実在的であることを示す論点がさらにもう一つある。それは、知覚経験の内容がパースペクティブ構造を備えている、という点である。

机の上にあるコインを見るとき、我々はそのコインを、そしてそれが円いことを知覚する。しかし意識に立ち現れるのは、あくまでそのとき立っている視点から見たコインの形である。ただし、別の視点に移動すればどのようにコインが現れるかを我々は了解している。そしてその了解をもっているということこそが、知覚内容が「コインが円い」であることを成立させているのである。そして現に立ち現われているコインの現れは現実的であるようにしか思えないが、他の視点に移動したら経験されるはずの現れは、そのように意識されることはない。

意識経験や知覚経験には内容の二重性がないと主張していること（註 45 および 48）を踏まえれば、鈴木は以上の批判を退けるはずである。しかしその場合、鈴木は知覚経験の内容について、適切な分析を与えられるかどうか疑問になる。そこで今回の発表では、鈴木 of 著作に含まれる他の論点を踏まえながら、知覚の経験内容の現実性を説明することが本当にできているのかを検討したい。